

『きっと、うまくいく』

2009年/インド/ラージクマール・ヒラニ監督作品

弁護士も「成功」ではなく 「優秀」を目指せ

会員 鈴木 啓太 (64期)



『きっと、うまくいく』
DVD & Blu-ray 発売中
価格：5,200円(税抜)
発売・販売元：ハビネット
© Vidhu Vinod Chopra
Production 2009. All
rights reserved

「きっと、うまくいく」(原題:「3 Idiots」)はインド映画である。この映画も、インド映画の基本的特徴から外れていない。すなわち、ミュージカルシーンがあり、上映時間が3時間、上映が半分程度終わった時点で15分程度の休憩が入る。この基本的特徴ゆえに、インド映画は敬遠されがちであるが、この映画は非常に面白いので紹介する。私は年間50~100本の映画を観る生活を10年以上続けているが、これは好きな映画ベスト10に入る。

物語は、インド内で最高峰の工科大学を舞台に、エリートエンジニアを目指す3人の学生を中心に展開される。念のため補足すると、インドは工学において世界最先端の地位にあり、そのインドで最高峰の工科大学ということは、世界で最高峰といってよい。また、インド特有の事情として、IT系の職業は近年になって登場した新しい職業であるため、カースト制度上の規定がなく、カーストが低い者でもITエンジニアになることで成功をつかむことができることから、優秀層が集まりやすいという背景もある。そうした状況下で、インド全国から集まった天才学生たちが苛烈な競争を繰り広げている。どのくらい苛烈かという点、これは実際に社会問題となり、劇中でも起こるが、学内試験の成績下位者が自殺するほどである。エリート学生たちが文字通り人生を賭けて入学し、研鑽に励んでいる。

物語の中心となる3人の学生は、それぞれ、ランチョー、ファラン、ラーजूという。なお、ランチョーについては、劇中で幾度か「変な名前」と嘲られるが、ファランとラーजूは変ではなくて、ランチョーが変という感覚は、日本育ちの日本人には理解は難しい。3人組は、原題が「3 Idiots」となっていることから分かるのとおり、いわゆる問題児であり、様々なドタバタを

引き起こす。成績に関しては、当然劣等かと思いきや、ランチョーは学年トップである。

この映画では、二つのストーリーが並行して進む。一つは、3人組が大学に入学した時からの学生時代の活躍を描いたもの。もう一つは、卒業して10年後に再会したファランとラーजूが、大学卒業後に一切の消息を絶ってしまったランチョーを探しに行く、というものである。それぞれの結末については、勿論書かない。

ランチョーは、苛烈な成績至上主義が支配する大学内においても、常に自由奔放に学びを続ける。意地悪な上級生からいじめられそうになったときには、その場で電流を放出する装置を自作して撃退し、またあるときは、成績重視の丸暗記至上主義の教師たちに平然と工学理論や教育論の議論をふっかけ、反論できなくなった教師から教室を追い出される。特に、成績至上主義の権化である校長とは激しく対立しており、校長は常にランチョーら3人組を退学にするチャンスを狙っている。このような状況下で起こる様々な出来事を通じて、3人の学生は、それぞれ成長し、進むべき道を見つけていく。

ランチョーは、徐々に成績至上主義に染まっていく学友たちに対して、このように述べる。「成功を目指すんじゃなくて、優秀を目指すべきだ。そうすれば、成功はおのずとついてくる。」

エンジニアも弁護士も、プロフェッショナルという点で共通しており、当然同じことが当てはまるはずである。私たち弁護士は、社会の一隅を照らす法律家をめざし、そして歩み始めたころに抱いた気持ちを、実務に追われているうちに、やがてどこかへ忘れていってしまうことがある。この映画を観ると、少しだけ時間が戻り、以前そうしたように、ひたすらに優秀を目指したくなるのである。